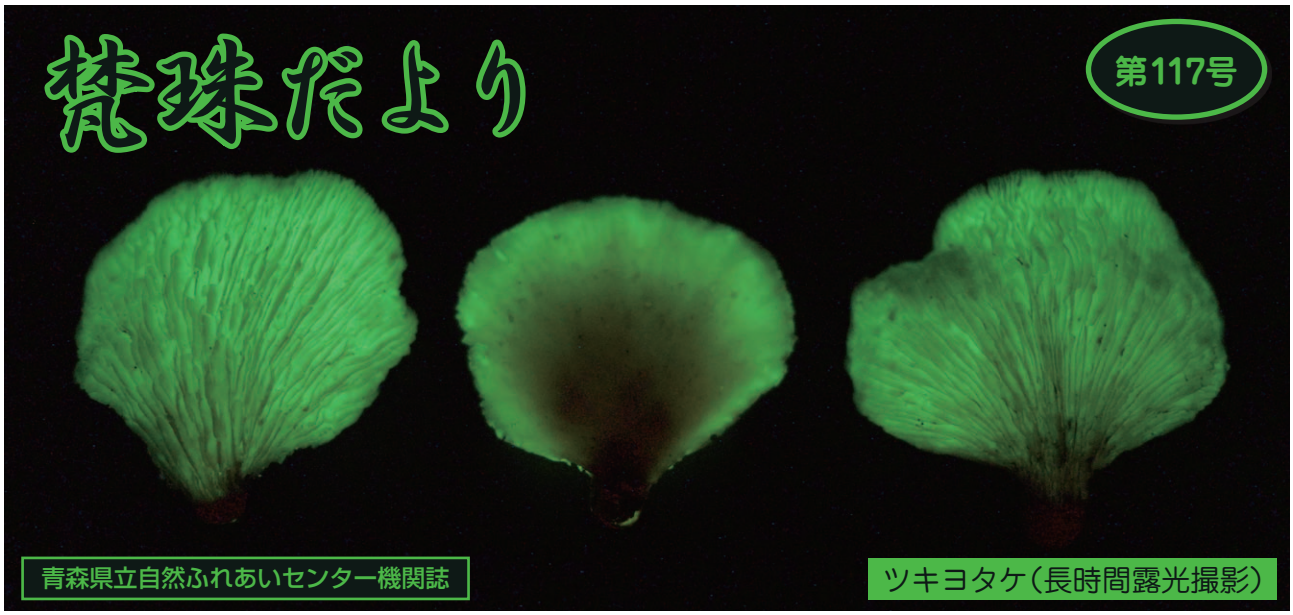

発行／青森県立自然ふれあいセンター　〒038-1301 青森県青森市浪岡大字大釈迦字沢内沢 1-1
TEL 0172-62-4527　FAX 0172-62-8510　URL http://www.jomon.ne.jp/~bonjyu/　メールアドレス bonjyu@jomon.ne.jp

□ 行事レポート □

※青森県新型コロナウイルス感染症緊急対策に則り、９月の行事は中止としました。

●センター開設記念行事　岩木山登山　７月３日（土）

青森県最高峰の岩木山を岳温泉登山口～山頂～八合目までのルートで歩きました。帰りの岩木山スカイラインからは眼下に雲海を見ることができました。

●ファミリーデイキャンプ 2021 in 梵珠山　７月17日（土）

白神山地ビジターセンター、森林博物館、県立自然ふれあいセンターの三館合同で実施し、テント設営教室、火起こし体験、燻製作り、自然観察などを行いました。

●八甲田山登山　８月29日（日）

酸ヶ湯登山口～仙人岱～大岳～毛無岱～酸ヶ湯温泉の周回コースで行いました。タチギボウシやミヤマアキノキリンソウなど、初秋の花を見つつ八甲田山登山を行いました。

●キバナアキギリ

齋藤 信夫（青森自然誌研究会）

キバナアキギリは梵珠山を代表する植物の一つと言っていいかも知れない。書籍では、この植物は本州、四国、九州の山野に普通に自生するシソ科の植物と紹介されるが、青森県内ではそれほど多くなく、津軽半島方面では梵珠山や少し北方の眺望山付近が北限となるような雰囲気があるが、確かなことは分からない。梵珠山では群生する場所もあり、８～10月にかけて独特の花を咲かせる。

私が初めてこの植物に遇ったのは梵珠山だった。一目見た瞬間、どこかで見たことがあると思ったのは、花の形状からだろう。要するに、とっさに、花壇を飾るサルビアを連想したのだ。その時は学名についての知識がなかったので似ているというだけで終わっていたが、後ほど学名を知った時、この植物の属名が「サルビア」となっていたことから納得した。ことに、キバナアキギリはサルビア - ニポニカというのだから、日本のサルビアといっても失礼ではないだろう。

キバナアキギリは梵珠山ではサワグルミの道の六角堂周辺に多く生育している。それも、歩道周辺の草藪が定期的に刈り払われるようになってからは、分布範囲を広げているように感じている。春先からキバナアキギリの生長を追うと、６月上旬には対生（対で生える）するほこ形の葉のほとんどがすでにすっかり広がっているが、花穂はまだ花を咲かせる段階にまでは成熟していない。そして、６月下旬から７月にかけてようやく黄色の花を咲かせはじめる。茎の先に花穂を集めているタイプの植物は、植物体全体の成熟順からして花の成熟が最後になってしまう。この植物の茎は四角形で、茎は丸いとの固定観念を持つ人はびっくりしたり感心したりするのが常である。

キバナアキギリは植物の受粉の仕組みの見事さを紹介する際に取り上げられることがよくある。それは昆虫の行動を熟知したような花の構造、特に花の中での雌しべと雄しべの位置関係が絶妙だからだという。その位置を確認すると、雌しべは一番上にあり、その下に花粉を出す雄しべ、一番下に花粉を出さない雄しべがある。蜜を求めてやってきたマルハナバチなどの昆虫は一番下のおしべに体を乗せる。そうすると、その重みで花粉を出す雄しべが下がり昆虫の体にさわり昆虫に花粉がつく。蜜を吸い終えた昆虫はそのまま別の花を訪れる。その時、飛び出している雌しべの柱頭に運んできた花粉をつけてしまうのだという。もちろん、二番目に訪れた花の花粉がまた昆虫の体につくのである。こうして、花を訪れるたびに、運んできた花粉を違う花に届けるのだという。まことに不思議である。

群れて咲くキバナアキギリ（2019年９月９日）

キバナアキギリの花を少し拡大。色鮮やかだ（2011年９月９日）

生物こよみ（昨年）　10月　☀☁☂：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
観察できたもの	カケス	ルリタテハ	ツリフネソウ・キツリフネ	ノシメトンボ・イヌタデ花	ゴジュウカラ・シジュウカラ	ゲンノショウコ花	ルリビタキ・ヒガラ	アカゲラ・ムラサキシメジ	アキアカネ	カワガラス・マムシ	キバナアキギリ花	オツネントンボ	ニホンザル	ヤマガラ・コガラ	オオハクチョウ	ニホンザル	ミカドフキバッタ	ホンドテン・ノコンギク花	カナヘビ	ゲンノショウコ花	ウグイス	ゴマナ花	ノスリ・ハナイグチ	ルリビタキ	イヌタデ実	ゲンノショウコ実	ゴジュウカラ	クマタカ・ホオジロ	アカゲラ・コゲラ	クサギカメムシ	ルリビタキ
天	☀	☀	☂	☂	☀	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☁	☀	☂	☁	☁	☁	☀	☁	☀	☀	☁	☂	☁	☁	☂	☂	☁	☁	☂	☀
℃	14	15	16	15	14	13	12	12	11	14	17	18	14	10	9	8	10	11	11	9	10	12	13	10	9	8	8	8	9	6	6
低	11	10	12	14	11	9	6	8	7	8	14	14	7	6	6	3	6	6	5	5	5	9	11	7	7	6	5	4	6	3	2

●アブラムシによって形成される、大型の虫こぶ

市田 忠夫（津軽昆虫同好会）

植物は生態系における生産者として、いろいろな動物に利用される。多くは直接葉や茎を食べるが、植物ホルモンに類似する化学物質を生産し、植物体を変形させ、次世代の生存、発育を有利にするものがある。それらは、虫こぶと総称される。虫こぶは、タマバエ（ハエ目）、アブラムシ、キジラミ（ともにカメムシ目）、ダニ目により形成されるものが多い。

タマバエの虫こぶは、各種維管束植物に寄生し、青森県から400種程が確認されている。ダニ目によるものは、形成者が昆虫ではないので、見つけても撮影や採集はしていない。

アブラムシの虫こぶは、葉が単純に巻かれたり、縮れたりするものが多く、これらも丁寧な調査はされていない。とは言うものの、アブラムシの虫こぶには、大きくて顕著なものがある。

見かける機会が多いものには、ヌルデミミフシやヌルデハベニサンゴフシがある。後者は名前のとおり、大きく美しいむしこぶである。ヌルデミミフシは、秋に虫こぶが成熟すると、虫こぶが開き、翅のあるアブラムシが飛び立ち分散する。ヌルデミミフシの越冬世代虫は、チョウチンゴケという蘚類に寄生することが戦前から知られている。これはヌルデミミフシに含まれるタンニンが、化学原料として重要であり、その増産のために、生態が朝鮮総督府農事試験場の技師により、研究されたからである。

ハクウンボクエダサンゴフシもアブラムシの虫こぶで、これは成熟するまで2年を要する。成熟した虫こぶに刺激を与えると、2齢の兵隊アブラムシが虫こぶ表面に現れ、外敵を攻撃する。この兵隊アブラムシは、平時には虫こぶ内部の清掃などを行う。

ヌルデハベニサンゴフシ

ハクウンボクエダサンゴフシ

生物こよみ（昨年）　11月　☀☁☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
曜	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月
観察できたもの	ウグイス・アキアカネ	ホンドタヌキ	アトリ群れ	ヒメネズミ	ミソサザイ	ツグミ・コゲラ	トウホクノウサギ	アカゲラ・シジュウカラ	ニホンカモシカ	カシラダカ・ツグミ	マミチャジナイ・シロハラ	アカハラ・ルリビタキ	ホンドテン	ヤマガラ・ゴジュウカラ	ウグイス・エゾビタキ	ニホンカモシカ	ツグミ・アカゲラ	ルリビタキ・ゴジュウカラ	ホンドギツネ	ミソサザイ・エナガ	エナガ・シジュウカラ	アオゲラ・ツグミ	エナガ・ヤマガラ	オオアカゲラ・コゲラ	アオゲラ・コゲラ	ツグミ・エナガ	ゴジュウカラ・シジュウカラ	ヤマガラ	ウソ・エナガ	コガラ・ゴジュウカラ
天	☀	☂	☁	☂	☀	☁	☂	☀	☃	☃	☁	☀	☀	☁	☀	☁	☀	☀	☁	☂	☁	☂	☁	☀	☀	☁	☁	☃	☃	☂
℃	17	13	12	8	12	15	18	14	5	3	4	10	13	9	14	14	11	15	22	19	11	8	5	6	10	7	6	2	2	4
低	4	6	4	2	2	2	7	5	1	0	-1	-2	1	1	0	4	0	0	10	11	5	5	2	1	-1	2	0	0	0	0

●シロカイメンタケ

湯口 竹幸（青森県きのこ会）

シロカイメンタケはツガサルノコシカケ科カンバタケ属のきのこで、ミズナラなどの枯れ木に発生し北日本でよくみられる。主に広葉樹を褐色分解し、ほぼ柄を持たないいわゆるサルノコシカケ型で数枚重なって発生することが多い。幼菌時は鮭肉色～オレンジ色で森の中で良く目立ち、はじめは傘表面に細かな粉状密毛を被り間もなく脱落し、徐々に白っぽく硬くなる。

似た名前の「カイメンタケ」は同科のカイメンタケ属のきのこで、マツなど針葉樹病害菌として知られる褐色腐朽菌であり「シロカイメンタケ」の白タイプということではない。梵珠山でも見かけて「マスタケ」であろうと見当を付けておいた。後日、成菌の姿を撮るべく立ち寄ったら「シロカイメンタケ」であった。特に幼菌時は似ており混同されることも多い。最初はどちらもサーモンピンク系で多汁質、重みがあり、縁は耳たぶ状にぷっくりしている。

東北では「マスタケ」を柔らかい幼菌時に食用とする地域が多い。菅江真澄の東北遊覧記にも朝食として食したと記録があるらしい。マスタケは色鮮やか、それを活かしてかマイタケと同列に評価する人もいるとか。北米ではこの仲間をチキンマッシュルームと呼ぶ。時にマスタケは不味くて、あんなものは食えないという人はシロカイメンタケを食べたのだろうか？と想像する。マスタケは生食では中毒することが知られているが、そもそもきのこの生食は危険だ。したがってパプリカ・赤タマネギのように生野菜サラダの彩りとしての利用はできない。

本菌はマスタケに比べて、重なって生える枚数（段数）が少なめで、縁の波うちは弱く成長すると平坦で半円形になっていく。色味はオレンジ色で濃度はやや薄く、すぐに白っぽく指でちぎれないくらい頑丈に硬くなる。マスタケは老成すると脆くなるが、本菌は発泡スチロールのように軽く強くなる印象がある。結合菌糸がよく発育してくるためだ。

本菌はツリガネタケなどの硬質菌と同様に、古来「ホクチ」として利用されるくらいで他に用途はないかと調べたら以下の情報があった。タイヤのゴムは天然ゴム同士を硫黄で結合させ伸縮性を持たせたものであるが、国内産の本菌からその硫黄分子を切り離す性質が見いだされたことから、天然ゴム分子を取り出し熱源として再利用する可能性が期待されている。本菌の秘められていた能力に期待したい。今後は車のタイヤを見たり、マス・サケの切り身の入った発泡スチロールトレイを見かけたらシロカイメンタケを思い出してほしい。

マスタケ　やや老菌

シロカイメンタケ　幼菌

シロカイメンタケ　成菌

生物こよみ（昨年）　12月　☀☁☂☃：昨年の天気　℃：昨年の気温（月最高気温）　低：昨年の気温（月最低気温）

日	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
曜	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木
観察できたもの	コガラ	アトリ	ヒヨドリ	ホンドリス	カケス・アカゲラ	アトリ・ヤマガラ	ヒガラ・カケス	ホンドリス	ニホンカモシカ	ミソサザイ・ゴジュウカラ	アカゲラ・カケス	ホンドギツネ	ツグミ・シジュウカラ	ゴジュウカラ・ヒガラ	ミソサザイ	ホンドギツネ・ホンドリス	アカゲラ・ゴジュウカラ	シジュウカラ・カケス	ホンドテン足跡	アトリ・ウソ・アカゲラ	スズメ	アトリ・ウソ	カケス・ヒガラ	セッケイカワゲラ	ウソ・アトリ	カケス	ヒレンジャク	※年末休館日			
天	☃	☁	☃	☁	☀	☂	☁	☁	☀	☂	☀	☁	☃	☃	☃	☃	☃	☁	☃	☃	☃	☀	☁	☂	☁	☁	☁				
℃	3	3	2	1	6	4	7	3	4	3	8	6	0	-3	-5	-4	-2	1	-2	-5	0	4	6	4	1	-1	3	2	0	-2	-5
低	0	-1	-1	-1	-2	-1	0	0	-1	-2	0	-1	-3	-5	-6	-7	-5	-4	-7	-7	-6	-3	-4	1	-4	-5	-4	-3	-2	-5	-9